

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
645	大化元年	◎	◎	祠を再建したと伝えられる(三尾)	
678	天武天皇 白鳳6年	4	2		春木神社創立(春来)
689	持統天皇 朱鳥3年	◎	◎		牛ヶ峯神社創立(越坂)
700頃	◎	◎	◎		須恵器片(竹田・ミヤブ)
700頃	◎	◎	◎		須恵器(井土・八日市)
700頃	◎	◎	◎		須恵器片(井土・イデの坂)
700頃	◎	◎	◎		土器片(井土・城坂)
700頃	◎	◎	◎		裏布目格子瓦(井土・城坂)
716	霊亀2年	◎	◎		常盤神社創立(中辻)
729～748	天平年中	◎	◎	行基菩薩満願寺大御堂を開山	
737	天平9年	◎	◎	九品山極楽寺(観音山相応峰寺)が創建される	
819	弘仁10年	◎	◎		歌長神社創立(歌長)
819	弘仁10年	◎	◎		美気津神社創立(高山)
848	嘉祥元年	◎	◎		湯村温泉が慈覚大師により発見されたといわれている
848	嘉祥元年	◎	◎		海上の大池が悪蛇のため山崩れが生じて、堤が崩壊し、下流域は大洪水となった
856	斉衡3年	◎	◎	慈覚大師円仁の高弟の作善上人によって「木造十一面観音菩薩立像」が観音山に安置される	
859	貞観元年	◎	◎	清和天皇より相応峰寺の号及び円通殿の額を賜わる	
861	貞観3年	◎	◎		巖山神社創立(飯野)
862	貞観4年	◎	◎	三尾の漁師が京都に上り干魚を献上、清和天皇から御神体を賜う	
869	貞観11年	◎	◎	八大荒神の社殿を建立(三尾)	
880	元慶4年	6	◎	二方郡の百姓が、海上に三隻の船を見たことを申し出る	
887	仁和3年	3	◎		七味郡高津村城主の復商、福村修理田中沢二郎が、春木の城山に築城・落成
927	延長5年	◎	◎	延喜式内社、浜坂では二方神社・大家神社・大歳神社	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
999	長保元年	2	◎		善住寺創設
1114	永久2年	◎	◎		須賀神社創立(内山)
1155	久寿2年	◎	◎	薬師寺を建立(三尾)	
1155	久寿2年	◎	◎		奈良宗光が湯村の白豪山(通称・城山)に築城する
1185	文治元年	◎	◎	平知盛・平通盛の一行が三尾に上陸したとの伝説	
1195	建久6年	◎	◎	薬師寺に法経塔を建立(三尾)	
1210	承元4年	◎	◎	高野山正知院の高野聖が三尾で死亡し埋葬される	
1221	承久3年	7	25	後鳥羽上皇が隠岐の島に流される途中に遭難し、三尾の住民に助けられる。	
1221	承久3年	◎	◎	薬師寺に石造の五重の塔を建立(三尾)	
1223	貞応2年	◎	◎	八大荒神の社殿改築(三尾)	
1244	寛元2年	◎	◎	大雨・大洪水で三尾の桜谷山崩れ7軒が家人もろ共流される	
1360	延文5年	◎	◎	南溟禅師が楞嚴寺を創立	
1382	永徳2年	◎	◎	揚梅親行、順徳院姫宮の御菩提領として服部庄領家職を楞嚴寺に寄進する	
1395	応永2年	◎	◎	八大荒神の境内拡張、石造鳥居建立(三尾)	
1398	応永5年	11	7	義満、但馬楞嚴寺をして、同寺領因幡服部荘領家職を安堵せしむ	
1400	応永7年	◎	◎	薬師が薬師堂となる(三尾)	
1404	応永11年	◎	◎	但馬守護山名時瀨、同国二方荘公文職を楞嚴寺に寄進する	
1409	応永16年	◎	◎	義持、但馬楞嚴寺をして、同寺領因幡服部荘領家職を安堵せしむ	
1412	応永19年	◎	◎	但馬楞嚴寺をして、同寺領因幡服部荘領家職を安堵せしめらる	
1414	応永21年	◎	◎	蓮台山上にあった久谷の八幡神社を、現在地に移転	
1426	応永33年	11	15		熊谷字寺谷に阿弥陀堂建立
1428	応永35年	3	8		前・正楽寺の鰐口が造られる(S45.3.30県重要文化財・工芸に指定)
1430	永享2年	◎	◎	但馬守護山名時瀨、同国楞嚴寺をして、同寺領同国内所々及び因幡服部荘領家職を安堵せしむ	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1430	永享2年	11	◎	大歳大明神本殿を建立(居組)	
1433	永享5年	5	◎	但馬守護山名時瀨、同国楞嚴寺領、同国服部領家職に段銭以下の諸公事を免除する	
1438	永享10年	◎	◎	足利義教、但馬楞嚴寺をして、同寺領、因幡服部荘領家職を安堵せしめる	
1458	文安2年	◎	◎	山名持豊、但馬楞嚴寺の寺領因幡服部荘領家職を安堵、ついで幕府義政もこれを安堵する	
1463	寛政4年	◎	◎	八幡神社社殿ふきかえ	
1480	文明12年	◎	◎	山名政豊、八木宗頼に命じて、但馬楞嚴寺に同寺領因幡服部領家職及び散在地などを渡らせる	
1483	文明15年	◎	◎	山名政豊、但馬楞嚴寺領因幡服部領家分に、先規により、段銭、諸役などを課することを免ずる	
1509	永正6年	◎	◎	山名到豊、但馬二方荘代官某が、同国楞嚴寺の寺中門前で違乱するのを停止させる	
1517	永正14年	◎	◎	但馬守護山名誠豊、同国楞嚴寺の寺領を安堵する	
1520	永正14年	◎	◎	塩冶彦五郎の楞嚴寺坪付	
1520	永正14年	◎	◎	八幡宮鳥居を再建する(久谷)	
1521	大永元年	7	◎	山名誠豊、楞嚴寺の寺領を安堵する	
1522	大永2年	7	◎	山名誠豊、楞嚴寺の寺領を安堵するとともにその造堂を激励する	
1523	大永3年	◎	◎	八大荒神境内拡張、神楽舎増築(三尾)	
1539	天文8年	5	8	芦屋城主、塩冶周防守死す	
1542	天文11年	5	◎	正八幡宮を再建(久谷)	
1559	永禄2年	◎	◎	八大荒神の社殿改築、編額つくる(三尾)	
1576	天正4年	◎	◎	諸寄城の草刈重継らが、尼子勝久のこもる鬼ヶ城を攻撃する	
1576	天正4年	5	◎	洪水により二方神社(指杭)の社殿が流失	
1580	天正8年	◎	◎	秀吉第二回但馬征伐により、芦屋城が落城し、城主塩冶周防守は鳥取に逃れる	
1580	天正8年	◎	◎	相応峰寺・楞嚴寺など焼失	
1581	天正9年	◎	◎	鳥取城吉川経家降伏し、鳥取に逃れていた芦屋城主塩冶周防守が丸山城に於いて自殺する	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1581	天正9年	◎	◎		秀吉軍、飯野に本陣を構え巖山寺十二か坊を焼き払う
1582	天正10年	◎	◎	芦屋城に鳥取の宮部の侍、勝野勘左衛門と浅見孫市の二人が城代として郡内を支配する	
1593	文禄2年	◎	◎		岸田村、岸田神社を改築する
1594	文禄3年	◎	◎	二方郡54ヵ村、太閤検地	
1601	慶長6年	◎	◎	山崎右京進、芦屋城主となる	
1615	元和元年	4	◎	栄福寺を日徳上人開山	
1617	元和3年	◎	◎	二方郡高帳がつくられる	
1617	元和3年	◎	◎	居組・諸寄村の海論裁許状	
1620	元和6年	◎	◎	宮城主膳、芦屋城の1万石の家督を継ぐ	
1627	寛永4年	◎	◎	宮城豊嗣陣屋を清富に移し、郡内を検地する	
1627	寛永4年	◎	◎	田井村を指杭村と改める。このころ極楽寺村を清富村と改める。	
1627	寛永4年	◎	◎	久斗谷の内、近在5ヵ村の入会山、引谷・親谷などにつき福富・高末村山論	
1635	寛永12年	◎	◎	妙経庵を栄福寺と改める	
1635	寛永12年	◎	◎		大熊と伊角村、木草刈取りをめぐって山論し大津奉行所へ度々でる
1635	寛永12年	◎	◎		一橋伊豆守一行、巡見のため湯村に小休止
1638	寛永15年	◎	◎	満願寺光叔恵春禅師、堂塔の荒廃を修補中興する	
1643	寛永20年	◎	◎	三尾と浜坂の漁師がシイラ漬で海論	
1643	寛永20年	◎	◎	芦屋城主、宮城主膳死去(39歳)により家名断絶。二方郡、五味金右衛門の支配となる	
1646	正保3年	5	◎	三尾、赤崎、和田の3ヶ村 間塩の境界で争い	
1647	正保4年	8	◎	中島左近大夫正弘、京都吉田家より久谷村正八幡宮の許状を受ける	
1648	慶安元年	◎	◎		岸田村と海上村、上山を争う
1649	慶安2年	◎	◎	亀谷に鉄山師塩屋庄右衛門がたたらばをはじめ	
1650	慶安3年	2	◎	浜坂村沖に流鯨あり、村の者が網で引きとめているところへ清富村の者が来て、わけまえを要求ろうぜ	
1650	慶安3年	3	◎	浜坂村より清富村の流鯨わけまえ要求につき、役所へ訴える	
1650	慶安3年	◎	◎	諸寄・芦屋寄鯨の配分がもとで奥山山論	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1651	慶安4年	9	◎	芦屋村の領内に浜坂村が網をおろしたので、これの中止を奉行所に訴える	
1652	慶安5年	2	◎	釜屋村と三尾村が海論。釜屋村よりアワビ・サザエの取料として三尾村に毎年酒一斗、田井の浜に米三升を出すことに決める	
1652	慶安5年	2	◎	芦屋村と諸寄村が入会山につき山論奉行所に訴え	
1652	慶安5年	◎	◎	奥山入会につき諸寄・芦屋山論、京都役所にて芦屋村の勝ち	
1652	慶安5年	◎	◎	釜屋の漁師が三尾の海で密猟し、海論(承応3年(1654年)和解)	
1652	承応元年	◎	◎	清富村の入口にある「南無阿弥陀仏」の碑(大きい方)建つ	
1652	承応元年	◎	◎	寄鯨の配分につき、芦屋村と諸寄村と争う	
1654	承応3年	4	◎	浜坂村と清富村が鯨につき争う。七釜・滝田(対田)村が中に入る。	
1654	承応3年	◎	◎	三尾が釜屋の漁師から入漁料をもらって入漁することで和解(慶安5年(1652)の海論)	
1655	明暦元年	◎	◎	諸寄の立橋権少副吉次、吉田家より白山権現など三社の裁許を受ける	
1656	明暦2年	◎	◎	浜坂村寿徳庵、京都本願寺に属し、寺号を西光寺と改める	
1656	明暦2年	◎	◎	新市村と金屋村山論	
1657	明暦3年	8	◎	加賀、小塩浦の肥後守稻荷船が遭難し、三尾住民が乗員7名を救助	
1657	明暦3年	◎	◎	清富村の入口にある「南無阿弥陀仏」の碑(小さい方)建つ	
1659	万治元年	◎	◎	三尾住民が難破船救助(土良七助死亡、他の7人救助)	
1662	寛文2年	9	◎	浜坂村の午頭天王(宇都野神社)を、赤坂山より遷宮	
1666	寛文6年	◎	◎	芦屋竜潜寺建立	
1666	寛文6年	11	◎		越坂村、二柱神社を再建する
1670	寛文10年	◎	◎	三尾住民が大阪浜町藤田屋伝右衛門の遭難船人救助	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1670	寛文10年	◎	◎		木地屋の最盛期(木地屋村数12、66戸、366人)
1670	寛文10年	◎	◎	亀谷山論起こり、戸田村が辺地村を奉行所に訴え	
1671	寛文11年	◎	◎	金屋村の住人喜右衛門・彦右衛門、タタラ用の炭焼きのため鹿間に入る	
1671	寛文11年	◎	◎	諸寄村・居組村海論	
1671	寛文11年	11	◎	第2回亀谷山論、戸田村と滝田・辺地村が争い、浜坂村会所で戸田村が勝となる	
1671	寛文11年	◎	◎	諸寄村は30石船6艘、25石船3艘で沖漁をしていた	
1672	寛文12年	◎	◎	このころ新田村を福富村と改める	
1672	寛文12年	◎	◎		牛峯山にあった牛峯寺を海上集落に下山させる
1673	寛文13年	◎	◎	高末・二日市村久斗谷中山論	
1673	延宝元年	4	◎	第3回亀谷山論、滝田・久谷・高末・正法庵・辺地村の代表5人が戸田村を豊岡奉行所へ訴える	
1673	延宝元年	5	◎	豊岡、石東源五兵衛のもとに、訴人滝田村大庄屋助之進、浜坂・竹田・湯村・七釜・清富村の代表と対決し、戸田村の勝となる	
1673	延宝元年	9	◎	滝田村大庄屋助之進、年寄惣兵衛、亀山山論敗訴につき、豊岡で斬首、獄門。助之進の子彦六(4歳)、惣兵衛子徳兵衛(15歳)も浜坂で斬首	
1674	延宝2年	◎	◎	前田与右衛門外4名が治良右衛門から水田を買って八大荒神に寄附(三尾)	
1675	延宝3年	◎	◎	この年飢饉	
1677	延宝5年	◎	◎		千原村と鐘尾村、万場が谷など4か所を争う
1679	延宝7年	◎	◎		海上村と石橋・岸田村、上山を争い豊岡代官裁許する
1680	延宝8年	◎	◎	この秋大水	
1680	延宝8年	5	◎		竹田村と栃谷村、徳原山を争い豊岡代官裁許する。徳原山は竹田分となり、従来のは栃谷が引き続き作る事となる
1681	天和元年	◎	◎	この年飢饉	
1682	天和2年	◎	◎	この年飢饉、洪水、田君谷山ぬけ	
1683	天和3年	9	◎	普請奉行、成田七郎右衛門巡見	
1683	天和3年	◎	◎	三尾、御崎間塩山論	
1684	貞享元年	◎	◎	三尾、赤崎間塩山論	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1684	貞享元年	◎	◎		飯野村巖山寺地蔵堂が再建される
1684	貞享元年	◎	◎	山田屋吉左衛門(栃谷村)徳原山に新田開発する	
1684	貞享元年	◎	◎	豊岡京極家による地詰が始まる。勝願寺この3月二反五畝二四歩免許地となる	
1685	貞享2年	◎	◎	二日市の国正寺創建	
1685	貞享2年	◎	◎	京極甲斐守が三尾を免租とする	
1686	貞享3年	◎	◎	このころ滝田村を対田村と改める	
1686	貞享3年	7	◎	大水がある	
1687	貞享4年	7	◎	浜坂村と芦屋村があじわらの入会につき争う	
1687	貞享4年	◎	◎	浜坂村大御堂を再建、南禅寺開山大明国師を勧請して満願寺を復興	
1687	貞享4年	◎	◎	このころ対田の威徳庵を天隣寺と改称	
1687	貞享4年	◎	◎	浜坂村と清富村が観音山の養住院の柴刈につき争い、豊岡奉行所に訴える	
1688	元禄元年	◎	◎	勝願寺再建	
1689	元禄2年	◎	◎		鐘尾村新田の耕作始まる
1690	元禄3年	11	◎	隠岐後矢尾村の五郎右衛門の船が難破し、三尾住民が2名を救助	
1691	元禄4年	◎	◎		飯野鎮守山王権現再建される
1692	元禄5年	7	◎	宮ノ谷に浜坂村が入込んで草を刈るので、芦屋村が豊岡奉行所に訴える	
1692	元禄5年	◎	◎		巖山寺本堂建立される
1695	元禄8年	◎	◎	三尾、浜坂の海論の結果、三尾は餘部の海を借りることに話し合い	
1696	元禄9年	8	◎	浜坂勝願寺京都智恩院末となる	
1696	元禄9年	◎	◎	鯛漁さかんで、浜賃金を支払って干鯛をしていた	
1696	元禄9年	◎	◎		石橋村新田開発される(海上村小又川より水引き)
1697	元禄10年	10	◎	浜坂村大庄屋六郎左衛門「国絵図改め」につき、組下の書上帳をつくる	
1697	元禄10年	◎	◎	三尾は、鋸・御崎間の海を借りる協定成立(入漁料銀15匁)	
1697	元禄10年	◎	◎	対田村の仁右衛門と徳右衛門が、豊岡奉行所に諸寄港の絹巻島近くに廻船のための灯明を立てたいと願い出る	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1700	元禄13年	◎	◎		石橋村新田の耕作始まる
1701	元禄14年	◎	◎	諸寄村と千原村がフカイゴ山を争論	
1701	元禄14年	◎	◎		熊谷善住寺焼失する
1702	元禄15年	◎	◎		岸田村地藏堂建立される
1702	元禄15年	◎	◎		千原村と諸寄村山論する
1704	宝永元年	◎	◎	鹿間山論始まる、辺地村と高末・正法庵・久谷・対田・二日市村	
1704	宝永元年	◎	◎	大美山山論起こる。境・辺地・高末・正法庵・対田・二日市	
1705	宝永2年	◎	◎	三尾、赤崎真城山論、福富・田井・対田・鎧・下浜・若松庄屋が中に入る	
1705	宝永2年	3	◎	三尾、御崎山論、浜坂村・香住村、両庄屋で仲裁	
1705	宝永2年	◎	◎	竜満寺類焼	
1705	宝永2年	◎	◎	浜坂村・芦屋村、宮の谷山論	
1705	宝永2年	◎	◎	浜坂村・芦屋村、あじ原山論	
1706	宝永3年	3	◎		飯野村巖山寺鐘鑄造する
1706	宝永3年	4	◎	芦屋浦に因幡網代の船が難船	
1706	宝永3年	◎	◎	大雨・洪水がある	
1706	宝永3年	◎	◎	芦屋村平内諸寄奥山にて松の木を伐り、芦屋村庄屋年寄が諸寄村にあやまり証文を入れる	
1707	宝永4年	6	◎	辺地・高末・正法庵・二日市・対田・久谷村が鹿間谷山を争う	
1707	宝永4年	6	◎	境・辺地・高末・正法庵・対田・二日市・大美山深谷山論豊岡で裁許	
1707	宝永4年	6	◎	久斗谷の内、引谷・親谷・西の谷など8か所につき、福富・高末が山論、豊岡で裁許あり入会ときまる。これは、福富・高末・対田・二日市・正法庵の5カ村入	
1707	宝永4年	9	◎	諸寄村の船が多くなり、居組村と争論、豊岡藩で裁	
1707	宝永4年	◎	◎		鐘尾村と千原村の万場が谷ほか3か所の山論裁許される
1707	宝永4年	10	4		大地震(東海・東南海・南海地震が同時発生)により18日まで毎日ゆれる
1708	安永5年	4	◎	浜坂・三尾・諸寄三カ村海境の裁許が出る	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1708	安永5年	◎	◎	美含郡の権右衛門の船が難破し、三尾住民が2名救助	
1708	安永5年	◎	◎	三尾、浜坂、諸寄の3ヶ村海境、裁許	
1708	安永5年	◎	◎	三尾に飢餓人が多数出る	
1708	安永5年	12	◎		山奥は一丈(3.03メートル)余りの大雪がふる
1709	安永5年	◎	◎	浜坂の漁師が三尾の海を侵害、訴訟となり、浜坂は三尾の海に入ってはならぬと裁許	
1709	安永6年	◎	◎		石橋村の池土手普請行われる
1709	安永6年	◎	◎	浜坂村の漁師が三尾の海に入り込み訴訟となる。浜坂村は三尾の海に入ってはならぬと裁許	
1710	安永6年	◎	◎	浜坂村・芦屋村が宮の谷山論	
1710	安永6年	◎	◎	浜坂村・芦屋村があじ原山論	
1711	正徳元年	◎	◎	諸寄村庄屋七右衛門が、灯明を立てることを豊岡藩に願い出る	
1711	正徳元年	◎	◎	かくれ谷より松村まで原山論	
1712	正徳2年	◎	◎	久斗山のたたら場にて殺人事件	
1713	正徳3年	7	◎	芦屋浦に隠岐島後の茂兵衛船が難船	
1713	正徳3年	10	◎	播州飾磨津伊丹屋嘉兵衛(2500石)の船が遭難し、三尾の住民が17人中15人を救助	
1714	正徳4年	5	◎	大水がある	
1714	正徳4年	3	◎	三尾、赤崎真城山論	
1714	正徳4年	◎	◎	三尾は代官所へ海料を納めることになる	
1716	享保元年	10	◎	三尾、赤崎の山の稼場の規定書できる	
1717	享保2年	◎	◎	栄福寺焼失	
1718	享保3年	◎	◎	浜坂村の漁師が、指杭村に海運上をたて、大しき網、かます網をしていた	
1718	享保3年	◎	◎	浜坂村源七が三尾の海で密猟し、海論	
1718	享保3年	◎	◎	浜坂村の大勢の漁師が鯛縄で三尾の漁師と海論	
1719	享保4年	◎	◎	八大荒神宮事業(三尾)	
1719	享保4年	◎	◎	田畑の開墾(三尾)	
1719	享保4年	2	◎	三尾、浜坂海論	
1719	享保4年	◎	◎	奉行所の仲裁で三尾御崎間の塩山論和解、三尾の地権となる	
1720	享保5年	5	◎	栃谷村・竹田村田君谷山論	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1720	享保5年	◎	◎		切畑村、新田耕作する
1721	享保6年	◎	◎	三尾が村の財産として墾作田を開発	
1721	享保6年	◎	◎	三尾が隣村との争いに対抗するために、分家を出すことを認める	
1721	享保6年	◎	◎	余部の海、鋸切より御崎の端の間の沖漁・磯漁とも、毎年新銀27匁で三尾が借りる	
1721	享保6年	◎	◎		石橋村、溜池普請を代官所に願い出る
1722	享保7年	◎	◎	大水、損害多し	
1722	享保7年	◎	◎	大庄屋、浜坂村米味屋幸右衛門は、鯛網の網元をやっていた	
1722	享保7年	◎	◎		飯野、観社大明神の社殿を建立する
1726	享保11年	1	◎	指杭村の小浜に寄鯨があり、浜坂村の者が引いて	
1726	享保11年	6	◎	三尾と赤崎村がワカメとりにつき争い、豊岡奉行所に訴える	
1727	享保12年	◎	◎	三尾村が赤崎村からの独立を願い出る(戸数28戸)	
1728	享保13年	7	◎	指杭・清富村系城谷山論起こる(清富が刈畑をし道をつける)指杭村が奉行所に訴える	
1728	享保13年	◎	◎	浜坂浦に美含郡若松村伝七の船が難船	
1728	享保13年	◎	◎	前年に続き、三尾村が再度、赤崎村からの独立を願い出る	
1729	享保14年	◎	◎	大水がある	
1730	享保15年	◎	◎	指杭村を叶村と改める	
1730	享保15年	◎	◎		湯村、切畑村の新田耕作始まる
1731	享保16年	◎	◎	下山大明神の社殿改築(三尾)	
1731	享保16年	◎	◎		岸田村と海上村、上山と畑が平を争い八か村の庄屋が立ち会う
1732	享保17年	3	◎	久谷村と対田村がすげ谷につき論争	
1732	享保17年	◎	◎	栃谷村の枝郷、田君村が分村願いを出す	
1732	享保17年	◎	◎		近畿以西、ウンカにより大凶作となる(享保の大飢饉)
1734	享保19年	4	◎	七釜村・栃谷村山論あり分け地1件	
1734	享保19年	◎	◎	鹿間山論、藤尾・辺地村の百姓が鹿間在の畑を押し取る、鹿間の勝となる。	
1734	享保19年	◎	◎	下山大明神の損壊修復する(三尾)	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1734	享保19年	◎	◎		鐘尾村、前村、さつまいもを試作する
1735	享保20年	4	◎	芦屋村と諸寄村が城山入会山論、芦屋村より諸寄	
1735	享保20年	10	◎	台風による大波打ち上げで三尾の家屋と船小屋数戸が流失する	
1735	享保20年	◎	◎	字おちい山山論起こる、田井村より赤崎村を生野役所に訴える	
1736	享保21年	◎	◎	三尾の漁師の妻と母が寄進して大島の弁財天社を再建造立する	
1737	元文2年	◎	◎	芦屋・諸寄村城山山論、両村より生野役所にさしだ	
1737	元文2年	◎	◎	字おちい山山論、二日市・三谷・久谷・細田庄屋で内済	
1738	元文3年	4	◎	芦屋村と諸寄村が城山入会山論、芦屋村より諸寄村を生野役所に訴える	
1738	元文3年	8	◎	芦屋・諸寄奥山山論再び起こる	
1738	元文3年	◎	◎	空山山論、空山の道が、浜坂にとって牛馬道取に必要であるが諸寄に道を除かれて困ることを生野役所に訴える	
1738	元文3年	◎	◎		相岡村と切畑村の大たんが山論裁許される
1740	元文5年	5	◎	空山山論、浜坂村の婦人が空山に糞草柴を取りに行ったところ、諸寄村にひどい目に合わされ生野役	
1740	元文5年	◎	◎	諸寄・芦屋村城山山論	
1741	寛保元年	◎	◎	諸寄・芦屋村入会山(城山)山論	
1742	寛保2年	◎	◎	三尾の板屋元屋敷を22軒が共同で買い取り、五良右衛門を入れ23軒共有となる	
1742	寛保2年	2	29		鐘尾天真庵初代庵主自暁尼死去
1742	寛保2年	4	◎	諸寄村と芦屋村が山論	
1743	寛保3年	4	◎	空山山論、浜坂村が諸寄村を不法入所と役所に訴	
1743	寛保3年	11	◎	竹田村が栃谷村を後山の件で寺社奉行所に訴える	
1744	延享元年	◎	◎	春に大雪となり、三尾で積雪7尺(212cm)を超えた	
1744	延享元年	7	◎	徳原山につき竹田村が寺社奉行所に訴える。栃谷村は反論する	
1744	延享元年	8	◎	諸寄・芦屋村城山山論、芦屋村より諸寄村を生野役所に訴える	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1744	延享元年	◎	◎	浜坂村満願寺の頑叟和尚、寺中に嘯月庵を建立する	
1745	延享2年	◎	◎	三尾が借りる余部の海の借料が5年限りの更新で銀15匁となる	
1745	延享2年	12	◎		竹田村と栃谷村、徳原山論、江戸評定書にて裁許される
1746	延享3年	◎	◎	叶村を指杭村と改める	
1746	延享3年	2	◎	戸田村・清富村差出明細帳あり	
1746	延享3年	4	◎		巡見使佐久間吉左衛門、天領御蔵巡視し湯村に泊まる
1746	延享3年	◎	◎	赤崎村で28軒を全焼、惣右衛焼という	
1747	延享4年	2	◎	栃谷村と二日市村が入会山につき争う	
1747	延享4年	8	◎	諸寄・芦屋村奥山山論、芦屋村より久美浜役所に訴	
1747	延享4年	◎	◎	徳原山論裁許につき入用銀のことで、栃谷村が、古市・新市両村を久美浜に訴える。田君山論の始まり	
1747	延享4年	秋	◎	大洪水がある	
1747	延享4年	◎	◎		俳諧の道を探求した俳人・森田因山(名を重興、字を九左衛門)が湯村に生まれる
1749	寛延2年	3	2	諸寄・芦屋村奥山山論、芦屋村より生野役所に訴える。浜坂・二日市・三谷庄屋で内済	
1749	寛延2年	7	2	但馬・丹後で大風雨がある	
1751	宝暦元年	12	◎	凶作にて対田村など11カ村が、仲屋小五郎より年貢米48石借用	
1752	宝暦2年	8	◎	浜坂浦に若狭の早瀬浦庄左衛門の船、越前鮎川浦の徳兵衛船、大丹生浦武兵衛が難船	
1752	宝暦2年	◎	◎		高山村、傘連判をつくる
1752	宝暦2年	4	◎		飯野巖山寺庫裏建替える
1752	宝暦2年	◎	◎		千谷村、ゑなご新田耕作始まる
1753	宝暦3年	◎	◎	浜坂村の廻漕船、22艘	
1755	宝暦5年	5	◎	諸寄・芦屋村城山山論、翌年互いに内済	
1755	宝暦5年	8	◎	鹿間在の畑を藤尾、辺地村が横領、鹿間が奉行所に訴え11月に鹿間の勝となる	
1755	宝暦5年	8	◎	藤尾と対田村が鹿間谷入会につき争論。裁許状あり	
1755	宝暦5年	8	◎	石見久手浦の源三郎船が浜坂浦で難船する	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1755	宝暦5年	◎	◎	満願寺に宝篋印塔を建立	
1755	宝暦5年	◎	◎	三尾で大火災が発生し、飢人が出る	
1755	宝暦5年	◎	◎	大水、6割の損失、餓人も出る	
1755	宝暦5年	◎	◎		岸田神社再建される
1755	宝暦5年	◎	◎		鐘尾村、前村、新田開発検地される
1756	宝暦6年	◎	◎	芦屋村差出明細帳あり	
1756	宝暦6年	◎	◎		幕末の名僧・漢三道一和尚が湯に生まれる
1757	宝暦7年	◎	◎	浜坂村勝願寺居間より出火し焼失	
1758	宝暦8年	◎	◎	芦屋浦に寄鯨あり、芦屋・諸寄村が争う	
1758	宝暦8年	12	◎	奥山入会につき諸寄、芦屋山論、芦屋より生野役所に訴える	
1759	宝暦9年	◎	◎		海上・内山・石橋・前の4か村新田破損修理、11年までに人夫2060人、銭136貫181文(34両)を要した
1760	宝暦10年	◎	◎	浜坂村・芦屋村の「差出明細帳」あり	
1761	宝暦11年	◎	◎	因幡網代村六良兵衛の船が遭難し、三尾住民が6名を救助する	
1761	宝暦11年	3	◎		巡見使遠藤源五郎一行、私領を巡見し湯村に泊まる
1761	宝暦11年	4	◎		巡見使永田藤七郎一行、天領を巡見し湯村に泊まる
1761	宝暦11年	◎	◎		桐岡村新田耕作始まる
1762	宝暦12年	4	5		善住寺再建(1701火災)
1762	宝暦12年	6	◎	芦屋・諸寄村城山山論内済	
1762	宝暦12年	◎	◎	三尾・浜坂両村海論	
1762	宝暦12年	◎	◎	三尾が余部に払う海料が銀42匁となる	
1762	宝暦12年	7	◎	4度目の亀山山論、戸田村より辺地・藤尾村を江戸奉行所に訴えたが、10月、浜坂・七釜・豊岡大庄屋などで内済、戸田の勝となる	
1762	宝暦12年	2	◎	三尾に流鯨あり、夜大風のため見失う	
1762	宝暦12年	◎	◎	洪水。古市・新市・七釜など堤防破損	
1763	宝暦13年	◎	◎	三尾に庄屋を置くように願い出る(この年、三尾には庄屋がなく廻状が赤崎で止まって三尾に来ないため)	
1763	宝暦13年	5	◎	栃谷・竹田村山論江戸奉行所に訴える	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1763	宝暦13年	10	◎	出る	
1763	宝暦13年	◎	◎	浜坂村児島屋又兵衛外8人の地主が、豊岡領に属する18ヵ村の年貢の件で奉行所に願い出る	
1764	宝暦14年	◎	◎	恵比須神社の社殿再造立(三尾)	
1764	明和元年	◎	◎	久美浜代官所から「新規に門・塀・ひさしなど作ってはならぬ」との布令が出る	
1764	明和元年	2	◎	隠岐の武兵太船が、芦屋浦に難船	
1764	明和元年	2	◎	亀谷山につき、藤尾在より戸田村を寺社奉行に訴える。亀谷山論につき戸田・鹿間代表江戸行き	
1764	明和元年	◎	◎	大凶作、対田蔵にて米32俵2斗紛失する	
1765	明和2年	◎	◎	竹田・栃谷徳原山論、江戸道中諸入用帳	
1765	明和2年	1	◎	栃谷村と二日市村が入会山につき争う七釜・新市・古市村と田君谷秣場論争、江戸行き(翌年にも江戸)	
1766	明和3年	◎	◎	戸田村が亀山山論に勝ち、江戸より旗を立てて帰る	
1767	明和4年	5	◎	浜坂浦に寄鯨あり	
1767	明和4年	◎	◎	たんべ井堰について、対田・指杭・田井・清富村が	
1767	明和4年	◎	◎	玄楼、竜満寺12世住職となる	
1767	明和4年	9	◎		青下村天満宮建立する
1768	明和5年	◎	◎		洪水及び大凶作で葛根にすがり生活する
1768	明和5年	2	◎		歌長で火災、45軒(堂1軒)焼失
1768	明和5年	2	◎		細田で火災、5軒焼失
1768	明和5年	4	◎	清富村と田井村が井堰で争う	
1768	明和5年	6	◎		湯村で火災
1769	明和6年	3	◎		歌長で火災、13件焼失
1769	明和6年	◎	◎	大凶作、対田御蔵所の米32俵が盗み出される事件あり、久谷村重郎兵衛入牢	
1771	明和8年	◎	◎	久谷村で1町1反歩に水がなく、稲作ができないことを井土村大庄屋、坂本次郎四郎に報告	
1771	明和8年	◎	◎	栄福寺再び焼失(1717年焼失)	
1771	明和8年	◎	◎	二方・気多・城崎・養父4郡の御料の百姓が、年貢を江戸回米物納では輸送に困るので、銀納を代官所	
1771	明和8年	◎	◎	浜坂針の元祖・市原惣兵が生まれる(1835年没)	
1771	明和8年	◎	◎		前村新田検地される

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1772	明和9年	◎	◎		切畑村、洪水後の復旧工事を願い出る
1772	安永元年	秋	◎	洪水あり	
1772	安永元年	◎	◎	浜坂村・芦屋村・清富村差出明細帳あり	
1773	安永2年	◎	◎	谷元、三尾坂の峠を切り下げての道路の改良工事	
1773	安永2年	3	◎		飯野村、巖山寺の土蔵建てる
1773	安永2年	◎	◎		切畑村、洪水後の復旧工事を再度(初回は、明和9・1772年)願い出る
1774	安永3年	◎	◎	浜坂村のあきば神社を再興する	
1774	安永3年	6	◎		湯村で火災、21軒焼失
1775	安永4年	12	◎	境村が年貢上納に困り、浜坂村仲屋より御蔵米を借りて完納	
1777	安永6年	2	◎		春來村大火
1777	安永6年	3	◎		丹土村で火災、2軒焼失
1777	安永6年	4	◎		丹土村で火災、1軒焼失
1777	安永6年	9	◎		千原村で火災、2件焼失
1777	安永6年	◎	◎		善住寺境内に阿弥陀堂を移築(1426建立)
1778	安永7年	◎	◎	三尾でゴマメマシタが大漁となり、三万貫の水揚げ、1軒当り小判3枚ずつ配当する	
1778	安永7年	4	◎		鐘尾村で火災31軒焼失、越坂村で火災1軒焼失、中辻村で火災33軒焼失
1778	安永7年	10	◎		三柱神社創立(内山)
1778	安永7年	◎	◎		石橋村、阿弥陀堂再建する
1779	安永8年	◎	◎	八大荒神の社殿大修理(三尾)	
1779	安永8年	4	◎	浜坂村大火、家371軒と2寺焼失	
1780	安永9年	◎	◎		岸田村、岸田神社を改築する薬師堂大破損につき復旧費用を得るため5日間の村芝居をする
1780	安永9年	◎	◎		岸田村、新田耕作始まる
1781	天明元年	11	◎	伯耆泊浦の藤七船が指杭浦に難船1人助かる	
1781	天明元年	◎	◎		湯村正福寺本堂再建する
1782	天明2年	◎	◎	暴風で三尾の家屋、漁船の被害甚大	
1782	天明2年	◎	◎	芦屋浦に加賀の木谷藤右衛門船が難船	
1782	天明2年	◎	◎		日本全国で大飢饉。相岡、春來、岸田、海上、中辻、切畑、丹土、多子が特にひどかった。
1783	天明3年	5	◎	能登羽喰郡地頭町忠兵衛船が難船	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1783	天明3年	◎	◎		天候不順で宮脇村より奥の6か村収穫皆無同様、定免を見取りにするよう代官所へ願い出る
1784	天明4年	◎	◎	水害、飢饉	
1784	天明4年	2	◎		前村で火災、1軒焼失。多子村で火災、7軒焼失
1784	天明4年	3	◎		切畑村で火災、8軒焼失
1784	天明4年	4	◎		鐘尾村で火災、6軒焼失
1784	天明4年	6	◎		竹田村で火災、5件焼失。切畑村で火災、3軒焼失
1784	天明4年	9	◎	浜坂村で火災、100軒余焼失	
1785	天明5年	1	◎	釜屋村に寄鯨あり	
1785	天明5年	◎	◎	八大荒神の石段大修理、石灯笼、長灯笼一対建立	
1786	天明6年	◎	◎	中島長七が因州から大量の網を仕入れて三尾の漁業振興を図る	
1786	天明6年	◎	◎	三尾で大火災が発生し、26戸を全焼する	
1786	天明6年	8	6		洪水により井土より下流で被害があった。
1787	天明7年	◎	◎	三尾の小間塩・間塩間の道路工事に着手する(寛政3年・1791年完成)	
1787	天明7年	◎	◎	この年大飢饉	
1787	天明7年	◎	◎	渡辺平兵衛にあてた体術全勝の巻あり	
1787	天明7年	◎	◎		石橋村溜池普請する
1788	天明8年	◎	◎	田井自得寺の貞心尼が末寺智光庵を開基する	
1788	天明8年	◎	◎	句集、老の柳出版される	
1788	天明8年	5	29		御料の巡見使一行(約100人)が、二方郡を視察。(一日市から浜坂で御昼、湯村に宿泊)
1789	寛政元年	◎	◎	巡見使坂尾監物、用土村にて病死	
1789	寛政元年	4	7		巡見使(約40人)が二方郡に来る。(浜坂で二泊し、湯村を通過して村岡へ行く)
1789	寛政元年	8	◎		熊谷村と伊角村の山論解決する
1790	寛政2年	3	◎		越坂村、二柱神社を再建する
1790	寛政2年	◎	◎	高末・正法庵両村旱損	
1791	寛政3年	4	◎	新市村の朱涯(丸谷常右衛門)が亡くなる	
1791	寛政3年	◎	◎	三尾の小間塩・間塩間の道路が完了(天明7年・1787年着手)	
1791	寛政3年	◎	◎		飯野村、薬師堂再建する

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1792	寛政4年	◎	◎	浜坂村の市原惣兵衛と渡辺丈兵衛が、長崎に針金商法に出向き、やがて針職人を連れ帰り、浜坂縫針の製造を始める	
1792	寛政4年	◎	◎	宝宣寺が京都万宣寺門徒に正式に加えられる	
1792	寛政4年	◎	◎		塩山村、新田耕作始まる
1793	寛政5年	◎	◎		飯野村、岩山神楽堂を新造する
1794	寛政6年	◎	◎	久谷村旱損	
1794	寛政6年	5	◎	久谷村清三郎より出火4軒焼失	
1795	寛政7年	4	◎		信州善光寺、日本中如来開帳に回り、千原村又右衛門宅にて昼食し岩井村へ発つ
1795	寛政7年	8	◎	洪水、古市・新市など石堤流される	
1795	寛政7年	8	◎		飯野村、巖山寺、地藏堂を普請する
1795	寛政7年	9	◎	浜坂浦の太右衛門船が、丹後の竹野浦で難船	
1795	寛政7年	11	◎	二方・朝来・養父・気多・出石郡の天領の村より、銀納値段が高くなって困るから、下げてもらおう生野代官所へ訴える	
1795	寛政7年	11	24		昼四つ(午前10時)大地震があり、余震が4～6日続く。荒湯が10日ほど止まる。(震源北緯35.7、東経134.3、M5～6)
1796	寛政8年	◎	◎	対田に豊岡藩の札場役人がおかれた	
1797	寛政9年	◎	◎		鐘尾村上河原水論
1797	寛政9年	◎	◎		中辻村下野新田水論・中嶋水論
1798	寛政10年	◎	◎	恵比須神社の社殿再造営(三尾)	
1799	寛政11年	6	◎	但馬の天領の村々が石代値下げを訴える	
1799	寛政11年	◎	◎		岸田山木地屋3戸、以後氏子駈帳より温泉町の木地屋が消える
1800	寛政12年	6	◎	居組村の竜雲寺薬師堂より出火し、方丈・庫裡・薬師堂の3棟を全焼	
1800	寛政12年	◎	◎	浜坂村御水帳の作成	
1800	寛政12年	◎	◎	田井村と対田村が井堰につき争論	
1801	享和元年	◎	◎	三尾村と赤崎村がわかれるよう代官塩谷大四郎に申し入れる	
1802	享和2年	◎	◎	清富村と田井・指杭村が黒河原新田の用水につき争論	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1802	享和2年	◎	◎		上垣守国「養蚕秘録」3巻著す
1803	享和3年	8	◎	居組浦に因幡賀露の伝兵衛船が難船	
1804	文化元年	◎	◎	八大荒神の石段を新しく取り替える(三尾)	
1805	文化2年	3	◎	えぞ地産物積船、兵庫津永福丸が諸寄浦で難船	
1805	文化2年	7	◎	芦屋村と諸寄村が城山につき争論	
1806	文化3年	◎	◎	天領・私領の組みかえあり、豊岡京極領の久谷村が天領に、天領の古市・新市・用土村が京極領となる	天領・私領の組みかえあり、天領の宮脇村が豊岡京極領となる
1806	文化3年	8	◎	江戸役人の一行、測量に来る。指杭村など絵図を出す	
1806	文化3年	◎	◎	森田因山・句集三日の月影出版	
1806	文化3年	◎	◎		因州浪人中島正宅、鐘尾村に借宅し騒動起こる
1806	文化3年	◎	◎	居組がシイラ漁業を始めることを企て、因州田後村と争う	
1807	文化4年	9	◎	居組村と田後村が、漁場を争う	
1807	文化4年	10	◎	大洪水	
1807	文化4年	◎	◎	医師 松田大順、高鉢山に見張所を作るよう幕府に具申する	
1807	文化4年	◎	◎		俳諧の道を探求した俳人・森田因山(名を重興、字を九左衛門)が亡くなる
1808	文化5年	◎	◎		石橋村井手、洪水により大破する
1809	文化6年	6	◎	浜坂村と清富村が、観音山につき争う	
1809	文化6年	9	◎	対田村天隣寺焼失	
1809	文化6年	◎	◎	三尾、浜坂間海論、赤島が浜村となる	
1810	文化7年	◎	◎	八大荒神 社殿修理(三尾)	
1810	文化7年	6	◎	清富村と指杭村が糸城山につき争う	
1810	文化7年	9	◎	久谷村の庄屋より出火、34軒を焼失	
1810	文化7年	◎	◎	医師 眞先祐哲が因州中河原村から三尾に来村、医業の外寺小屋を開設	
1811	文化8年	◎	◎	至誠如神の碑が立つ	
1811	文化8年	4	◎	久谷村の年寄、助右衛門の灰小屋より出火、類焼57軒、残り12軒	
1811	文化8年	◎	◎	対田札場引請相対証文あり	
1812	文化9年	1	◎	指杭村に寄鯨あり	
1812	文化9年	6	◎	浜坂村と指杭村が漁場を争う	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1812	文化9年	10	◎	加賀の本谷松任屋長三郎の船が諸寄浦で難船	
1813	文化10年	5	◎	諸寄村・釜屋村が漁場を争う	
1813	文化10年	5	◎	因州賀露浦竹田屋八十兵衛船難船	
1813	文化10年	10	◎	居組村と諸寄村が漁場を争う	
1813	文化10年	10	◎	諸寄浦で因幡賀露浦の角屋武兵衛の船ほか2艘が難船する	
1813	文化10年	◎	◎	余部の海での入漁紛争、医師・眞先祐哲の仲裁で和談	
1814	文化11年	2	◎	対田村で出火、天隣寺末円通庵外12軒を焼失	
1814	文化11年	◎	◎	船宿帳あり	
1815	文化12年	7	◎	諸寄浦にて大阪飴屋九兵衛が難船	
1815	文化12年	11	◎	対田村御蔵所の米値段が高くなるという風聞により騒動が起こる	
1816	文化13年	4	◎	古市村より田君谷の砥石を掘ることを豊岡奉行所に訴える	
1816	文化13年	8	◎	久斗山村の伝次郎が猪・猿が少なくなったのを幸いに新田開発を訴える	
1816	文化13年	◎	◎	船宿帳あり	
1818	文政元年	◎	◎	三尾で友二郎、庄吉がシイラ漬漁業初操業	
1819	文政2年	6	◎	相撲取りの岩石七之助が死んで、飛鳥野勇七がその供養碑を建てる	
1819	文政2年	◎	◎	蒼竜発句集	
1819	文政2年	◎	◎	大島弁財天御社再建(三尾)	
1820	文政3年	4	◎	伯州橋津浦直乗船頭孫七船が諸寄浦で難船	
1820	文政3年	◎	◎	八柱神社・三柱神社改築(三尾)	
1820	文政3年	◎	◎	下山大明神を下山権現社と改める(三尾)	
1820	文政3年	◎	◎	京都吉田殿から八大、三宝両荒神に大宮司の称号を授かる	
1821	文政4年	3	◎	浜坂村の藤兵衛灰小屋より出火、95軒焼失	
1821	文政4年	4	◎	用土村恒次郎より出火し大火となる	
1821	文政4年	6	◎	芦屋渦カ森平九郎死す	
1821	文政4年	◎	◎	田井村の自得軒より出火し、楞嚴寺・慈濟軒も類焼	
1822	文政5年	◎	◎		温泉町にも寺小屋が出来始める

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1822	文政5年	3	◎		飯野村巖山寺、2尺5寸の巨鐘を下の田んぼでつくる。鋳物師城崎郡森村順右衛門、作料銀700匁かかる
1824	文政7年	8	◎		大雨で洪水、夜中飯野村西山に山崩れ、大門前まで川越しに押し上げ田畑破損する
1824	文政7年	◎	◎	このころ三谷村の良蔵が、餘部で鉄山をする	
1824	文政7年	◎	◎	香住村勘次郎が、久斗山にたたら場をはじめる	
1824	文政7年	◎	◎	諸寄、鳳影の句集、「発句の抜集」できる	
1825	文政8年	12	◎	米を他村に売る商人が出て、浜坂・諸寄村で騒動になりかける	
1825	文政8年	◎	◎	恵比須神社再建(三尾)	
1826	文政9年	◎	◎	この年より天保6年(1835年)にかけて「諸廻船往来改帳」あり	
1826	文政9年	◎	◎	札場御用達仲間規定あり	
1827	文政10年	◎	◎	三尾、和田両村山論	
1828	文政11年	4	◎	相撲取りの飛鳥野勇七死す	
1828	文政11年	4	◎	三尾、浜坂両村海論、丹波屋兵右衛門らの仲裁で	
1828	文政11年	8	◎	浜坂浦に越前の松下嘉兵衛船が難船	
1828	文政11年	9	◎	対田村と正法庵村が奥山の山論	
1828	文政11年	◎	◎	三尾川の橋を石造りに改築工事着手(文政12・1829年に完成)	
1829	文政12年	◎	◎	大雪となり、三尾で積雪6尺(181.8cm)から8尺(242.4cm)となり、村人が屋根の上を歩いたという	
1829	文政12年	◎	◎		鐘尾村農民10人、村役人選出について連判する
1830	文政13年	2	◎		千原村で火災、28軒焼失
1830	文政13年	8	◎	大雨大洪水で三尾の石造りの橋、家蔵49軒流失、3人が死亡。三尾・赤崎・和田・居組の四カ村の被害が大きかった。	
1830	天保元年	◎	◎	豊岡札場規定取替書あり	
1831	天保2年	◎	◎	神官、立橋好平が寺子屋を開く	
1832	天保3年	3	◎	清富村田中嘉五郎が清富村に回国供養塔を建てる	
1832	天保3年	6	◎	城米船、大阪北之新地油屋嘉兵衛船難船	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1832	天保3年	11	◎	米価高価につき一揆寸前にいたる	
1832	天保3年	11	◎		大地震おこる
1832	天保3年	◎	◎	観音山相応峰寺・圓通殿建立	
1833	天保4年	◎	◎	養蚕振興に尽力した日浦政吉が、諸寄に生まれる	
1833	天保4年	9	◎	越後柏崎の孫太夫船が諸寄浦で難船	
1833	天保4年	9	◎		豊岡藩家老舟木外記、領内巡見する
1834	天保5年	3	◎	美含郡一日市村の田谷屋佐助の船が遭難し、1人死亡、三尾住民が1人を救助	
1834	天保5年	3	◎		飯野村で火災、12件焼失
1834	天保5年	7	11		飯野村的場から出火し、90軒以上が焼失する
1835	天保6年	2	◎	諸寄浦を出帆した城崎郡瀬戸浦の太左衛門の船が三尾浦で遭難し、三尾住民が三人を救助	
1835	天保6年	6	◎	浜坂針の元祖市原惣兵衛死す(1771年生まれ)	
1835	天保6年	◎	◎		悪作困窮のため因州に出稼ぎの女5人、因州岩本より船出し居組沖で難破死亡する
1836	天保7年	◎	◎	六百石積の兵五郎の船が遭難し、三尾の庄吉、友二郎のシイラ船が発見、救助	
1836	天保7年	9	◎	全国的な大凶作で代官所から簡略せよとの通達。芦屋・赤崎・三尾・久谷など各村で儉約申合せ規定	
1836	天保7年	◎	◎	客船帳あり	
1836	天保7年	◎	◎		今岡村、川替普請する
1836	天保7年	◎	◎		大凶作で城崎、気多、養父、二方郡で久美浜代官所へ嘆願書を提出する
1836	天保7年	8	◎		豊岡藩堀基太夫一行、郡中見分けし銀が津留めとなる
1836	天保7年	◎	◎		細田村源左衛門の土蔵を借り米粃を納める
1836	天保7年	◎	◎		飢饉のため豊岡領二方郡に扶食支配係として細田村庄屋源左衛門、切畑村庄屋与七郎、古市村庄屋又兵衛、田井村庄屋助左衛門の4名を任命する
1837	天保8年	◎	◎	前年の凶作のため大飢饉となる。浜坂・諸寄・居組・釜屋・湯村など、郡内の餓死者が正月より9月までおよそ2000人という(うち三尾では23人死亡)	
1837	天保8年	4	1		正楽寺が隣家の出火により類焼
1837	天保8年	◎	◎	諸寄の萬霊塔できる	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1837	天保8年	2	◎		豊岡藩扶食方神矢安八、細田庄屋と共に回村し、郡中極難渋人、飢寒人に対し米15石と銀札を給す
1837	天保8年	2	◎		大塩平八郎の人相書回る
1837	天保8年	4	◎		前村で火災、9件焼失。正楽寺も焼ける
1837	天保8年	7	◎		飢饉と疫病流行かさなり死者続出
1837	天保8年	◎	◎		細田村に郷蔵並びに貯穀の粕蔵建つ
1838	天保9年	◎	◎	浜坂高見の萬霊塚できる	
1838	天保9年	◎	◎	三尾の又助の船が鯨を発見し、他船と共同で三尾まで曳いて帰る	
1838	天保9年	3	◎	大塩平八郎らおたずねの人相書回状にまわる	
1838	天保9年	4	◎	高見に万霊塚建つ。諸寄村の丈右衛門・忠五郎らが万霊塔を建てて	
1838	天保9年	◎	◎	教育者・森梅園(周一郎)が浜坂に生まれる(1920)	
1838	天保9年	4	◎		天領巡見使一行、湯村で昼食後村岡へ発つ
1838	天保9年	4	◎		私領巡見使一行、湯村で昼食後村岡へ発つ
1838	天保9年	◎	◎		巡見使通行に伴う道造りのため春木村より人夫130人余り出る
1838	天保9年	7	◎		丹土で火災、3軒焼失
1838	天保9年	◎	◎		前村正楽寺本堂庫再建する
1838	天保9年	9	◎		豊岡藩奉行田村多聞、領内巡見する
1838	天保9年	9	◎		竹田村で火災、12件焼失
1839	天保10年	4	◎	温泉町の八日市の河原に多数集り騒動との風聞	
1839	天保10年	◎	◎	三尾の漁師が、漁船二艘で沖漁中に浜坂漁師の連中に漁具を取られる	
1839	天保10年	◎	◎	三尾で村芝居を興行(箱根八段から十一段まで)	
1840	天保11年	◎	◎	三尾、浜坂海論、久美浜代官所に訴え出る	
1840	天保11年	◎	◎	池田屋宇三郎が、針金屋五右衛門にあてた北国得意預ヶ証文	
1840	天保11年	4	◎		丹土村で火災、25軒焼失。塩山村で火災、5軒焼失
1840	天保11年	◎	◎		飯野村薬師堂再建する
1840	天保11年	◎	◎		飯野村で火災、3軒焼失。大庄屋中井久右衛門宅類焼

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1841	天保12年	4	◎	三尾浦で加州宮腰松葉屋権右衛門の船が遭難し、船頭のみが助かる	
1841	天保12年	9	◎	諸寄竜満寺失火、山門・鐘楼・経蔵を除きほとんど焼失	
1841	天保12年	◎	◎	諸寄村網規定できる	
1841	天保12年	◎	◎	恵比須神社の屋根葺き替え(三尾)	
1842	天保13年	◎	◎	三尾、浜坂海論	
1842	天保13年	7	◎	三尾の若連中が規約を作る	
1842	天保13年	11	◎	三尾に流鯨あり、勇助銀60匁で落札	
1842	天保13年	11	◎		多子で火災
1842	天保13年	◎	◎	洪水により和田・赤崎の田畑が荒地となった	
1842	天保13年	◎	◎	異国船渡来の際の処理について申し渡し出る	
1842	天保13年	◎	◎	字中くずし鉄砲場について、指杭村と清富村が争論	
1843	天保14年	2	◎	因幡の医師真先献寿が三尾に修行に来る	
1843	天保14年	3	◎	諸寄浦湊口で松平因幡守の手船が難船する	
1843	天保14年	◎	◎	三尾、浜坂海論。諸寄庄屋らにより和解	
1843	天保14年	◎	◎	三尾に流鯨あり	
1843	天保14年	◎	◎	城崎郡・二方郡、石代値下げ願書を出す	
1843	天保14年	◎	◎	芦屋村・浜坂村網子論争	
1843	天保14年	◎	◎		湯村の澤山士常「二方考」を識す
1843	天保14年	◎	◎	異国船の来航に田井村、指杭村、大筒を用意し、祖岡村は軍用人夫16人を出す	
1843	天保14年	3	◎		豊岡藩舟木下記、領内巡見のため湯村に泊まる
1844	天保15年	◎	◎	浜坂村の重次郎、魚問屋をする	
1844	天保15年	◎	◎	大雨、大洪水で被害甚大、三尾の甚六の家から下側は一面の海となり、舟の多くが流失	
1845	弘化2年	3	◎	浜坂村の儀右衛門が味原に水車をつくる	
1845	弘化2年	8	◎	浜坂村の林作が芦屋村に地藏尊を建つ	
1845	弘化2年	◎	◎	岡本流体術誓詞と体術の巻物	
1845	弘化2年	◎	◎	三尾の下荒の浜に寄鯨	
1845	弘化2年	◎	◎	正法庵早損、開田の稲育たず	
1845	弘化2年	◎	◎	三尾の大島に木造の観音像漂着、弁財天社内に合祀する	
1846	弘化3年	4	18	古来まれなる大風	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1846	弘化3年	6	◎	三尾浦で越前国南条郡河野浦直船頭嘉蔵の舟が遭難	
1846	弘化3年	7	◎	三尾浦沖で伯耆橋津の源四郎船(2人乗り)が難船	
1846	弘化3年	◎	◎	秋の暴風雨で凶作となる。餓死人が多く、御用米の用意ありとお上から達しあり	
1846	弘化3年	◎	◎		春來村、万福寺焼失する
1847	弘化4年	8	◎	田井村と指杭村が田井の奥山につき山論	
1847	弘化4年	8	◎	浜坂村に飛鳥野勇七の塚を和泉川文治郎が建てる	
1847	弘化4年	◎	◎		飯野村、巖山寺本堂再建する
1847	弘化4年	◎	◎	大洪水出る	
1848	嘉永元年	4	◎		伊角村、人形芝居をする
1848	嘉永元年	8	◎		丹土村で火災、4件焼失する
1848	嘉永元年	12	◎	二日市村の吉三郎の灰小屋から出火し6軒を焼失	
1849	嘉永2年	4	◎	豊岡藩より異国船にそなえ万全を期せよ、との回状が来る	
1849	嘉永2年	4	◎	軍立御用人足取調規定できる	
1849	嘉永2年	6	◎	川下祭で騒動がおこり、入牢者多数となる	
1849	嘉永2年	7	◎	久谷村でばくち騒動おこり、宿預け、入牢者多数	
1849	嘉永2年	9	◎	正法庵と対田村が奥山につき山論	
1849	嘉永2年	◎	◎	高末村旱損	
1849	嘉永2年	◎	◎	凶作にて百姓一統困窮	
1849	嘉永2年	◎	◎	対田・正法庵・辺地・高末村、たもの木井堰取替し証文	
1850	嘉永3年	4	◎	増田作右衛門手代大羽金蔵丹後袖志より居組まで視察	
1850	嘉永3年	4	◎	三尾、浜坂両村海論	
1850	嘉永3年	春	◎		飯野村、巖山寺本堂が春に完成
1850	嘉永3年	8	◎	前代未聞の大洪水となる	
1850	嘉永3年	◎	◎	洪水不作のため、但馬一円厳しい窮乏となる	
1850	嘉永3年	◎	◎	海岸の地図を出せとの廻状あり	
1851	嘉永4年	2	◎	豊岡藩家老舟木老之助、二方海岸を検分	
1851	嘉永4年	3	◎	大水、栃谷村など16ヵ村田畑悪作	
1851	嘉永4年	◎	◎		夏川文治郎の川除普請に対し、鐘尾村農民が訴訟する

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1852	嘉永5年	7	◎	三尾浦で加賀国港町熊田屋八兵衛の船が遭難、三尾住民が救助する	
1852	嘉永5年	◎	◎	八大、三宝荒神にそれぞれ石造唐獅子奉納(三尾)	
1852	嘉永5年	◎	◎	浜坂村の多くの魚仲買業者が、芦屋の浜で盛んに干鰯をした	
1853	嘉永6年	3	◎	芦屋浦に隠岐周吉郡の船が難船し、船頭以下水死する	
1853	嘉永6年	◎	◎	魚問屋規定できる(三尾)	
1853	嘉永6年	◎	◎	三尾沖でシイラ漬につかまっている4人の漁師を三尾の漁師が助けて帰る	
1853	嘉永6年	6	◎		湯村で火災、106件焼失
1853	嘉永6年	8	◎	高末・正法庵・辺地村大干ばつ豊岡奉行所へ願書	
1853	嘉永6年	◎	◎		大日照りにて、堤が干上がる
1853	嘉永6年	11	◎	浜坂浦に隠岐島後失尾村の徳十郎が難船	
1853	嘉永6年	12	◎	異国船が来て騒がしい時代なので、二方郡口組の庄屋が申し合わせ規定を作り、献金する	
1854	安政元年	◎	◎	流鯨を発見し、三尾に曳航する	
1854	安政元年	11	◎	大風となり、二日市村で7軒がふき倒される	
1854	安政元年	◎	◎	大洪水。久谷・和田村など16ヵ村堤防大破	
1854	安政元年	◎	◎		大地震が度々おこる(安政東海地震・安政南海地震・伊賀上野地震)
1855	安政2年	8	◎	近年干ばつのところ、出水	
1855	安政2年	◎	◎	正法庵大干ばつ	
1855	安政2年	◎	◎	伯耆国夏泊の漁船を大荒の海上で発見、三尾の住民が救助に向かい2人が死亡したが1人を助ける	
1855	安政2年	◎	◎	牛市規定がつくられた	
1855	安政2年	◎	◎	京極飛驒守二方郡地方巡視	
1855	安政2年	◎	◎		湯村牛市再開を申請する
1855	安政2年	2	◎		豊岡藩主京極高厚公、但馬海岸お固め係りとなり二方郡を巡見する
1855	安政2年	3	◎		池田草庵、書生2人を伴い二方の門人訪問の旅に出る
1856	安政3年	7	◎		多子で火災、37軒焼失

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1856	安政3年	8	◎	芦屋浦に丹後与謝郡の船が打ち上げられる	
1856	安政3年	12	◎	二方郡御料所郡中取締役に二日市村宗右衛門が命じられる	
1856	安政3年	◎	◎		幕府及び豊岡藩は、領内寺院に釣鐘の供出を命じる
1857	安政4年	1	◎	三尾の喜左衛門灰小屋より出火、28軒を焼失	
1857	安政4年	2	◎	浜坂村百姓町より出火し損失多分	
1857	安政4年	2	16	昼九ッ時出火、元寺町・奥中・芝村残らず焼失、家屋104軒焼失	
1857	安政4年	4	◎		熊谷村神田で火災
1857	安政4年	◎	◎	真先献寿が乙野重衛門から魚問屋の権利を買い取り村の運営にする	
1857	安政4年	◎	◎	森梅園(周一郎)が、池田草庵の青谿書院(八鹿)に入門	
1857	安政4年	6	◎		善住寺の不動明王画像・弘法大師画像・四所明神
1858	安政5年	1	◎	幕府外国奉行堀識部正一行、浜坂に来る	
1858	安政5年	2	◎	寺々の鐘をつき、徒党が勝願寺に集まり、打ちこわしが始まる	
1858	安政5年	2	◎		千原村で米が払底し、騒動がおきる
1858	安政5年	5	◎		飯野村松神社地内に稻荷の小祠再建する
1858	安政5年	◎	◎	修行者、役谷竜孫、居組に寺子屋を開く	
1858	安政5年	◎	◎	正法庵早水、大悪作	
1858	安政5年	◎	◎	清富村と浜坂村との間で糞肥につき争論	
1858	安政5年	◎	◎	三尾に寄鯨があり、代官所が来て入札をする	
1858	安政5年	◎	◎		鐘尾村で米騒動起り、打ちこわし発生
1859	安政6年	1	◎	丹後・但馬両国惣代が、海岸防備上納金延期を久美浜役所に願い出る	
1859	安政6年	4	◎	御料所浜坂村外15カ村で蚕飼糸数量を調査	
1859	安政6年	◎	◎	コレラが大流行し、三尾で29人死亡	
1859	安政6年	7	◎		6月ごろ因州鳥取辺にコロリ病が大流行し、当地にも流行する
1859	安政6年	8	◎	浜坂浦の吉次郎船が津居山湊で難船	
1859	安政6年	8	◎	芦屋浦で丹後与謝郡の米屋岩蔵の船が難船	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1860	万延元年	◎	◎	植付頃より長雨、諸作物悪作にて、対田御蔵米値段167匁	
1860	万延元年	◎	◎	八大荒神に朝顔水鉢を奉納(三尾)	
1860	万延元年	◎	◎	中村弥平が三尾・浜坂間に定期便を開業	
1861	文久元年	2	◎	不穏、浜坂・福富・諸寄・久谷村で、手鎖で村あずけとなる者があつた	
1861	文久元年	◎	◎	八大荒神飾り狛犬一対奉納(三尾・作者丹被国柏原村権治)	
1861	文久元年	◎	◎	佐渡の無人船が三尾に漂着し、積荷の件で三尾村が大損害を受ける	
1862	文久2年	8	◎	栃谷村に鬼角山一郎兵衛の塚を建てる	
1862	文久2年	9	◎	ハシカが流行し、薬種が高くなる	
1862	文久2年	◎	◎	三尾、赤崎山論	
1862	文久2年	◎	◎	僧、福光公尊が、諸寄に寺小屋を開く	
1862	文久2年	◎	◎		飯野村山王権現山門を再建する
1863	文久3年	3	◎	二方郡海岸防禦行軍帳	
1863	文久3年	3	◎		善住寺・開祖覚増上人画像
1863	文久3年	8	◎		霧滝、肥前畑、金毘羅大権現勧請する
1863	文久3年	10	◎	生野義挙につき、浜坂村庄屋長十郎らに、久美浜代官所に出頭命令が来る	
1863	文久3年	11	◎	村岡藩の田結庄八十郎が、二方郡海岸防備につき、因州に出張	
1863	文久3年	◎	◎	僧、湯浅秀学が、竜満寺に寺子屋を開く	
1863	文久3年	◎	◎	三尾と赤崎がスイ谷の牛飼場のことで論争	
1864	元治元年	4	◎	和田村為十郎より出火、大火となる	
1864	元治元年	◎	◎	浜坂の針金職規定あり	
1864	元治元年	◎	◎	山名主水助が浜坂・芦屋の浜で、大砲の試射を計画する	
1864	元治元年	◎	◎	浜坂村と二日市・福富村の間で糞肥につき争論	
1864	元治元年	◎	◎	三尾、余部海論	
1864	元治元年	◎	◎	三界萬霊塔建立(三尾)	
1865	元治2年	◎	◎	三尾と余部村が、漁稼ぎ争い	
1865	元治2年	◎	◎	長州征伐の人夫、二方郡口組の天領地割り当て、18人	

歴史年表 ※月日の◎表示は年日の特定できないもの。また、表示は旧暦による。(更新日:H22.3.1)

西暦年	元号年	月	日	記事	
				旧浜坂町	旧温泉町
1865	慶応元年	◎	◎	三尾、余部両村が下立島の漁場の件で紛争し、眞先献寿の仲裁で和解	
1866	慶応2年	5	◎	長州征伐につき、天領の村々で、久美浜代官所に御用金を出す	
1866	慶応2年	8	◎	前代未聞の大洪水となり、大きな被害。古い文書では5割の損失	
1866	慶応2年	12	25	朝鮮の船人12名、難風にあい、諸寄に漂着	
1866	慶応2年	◎	◎	眞先献寿が魚問屋の権利を三尾村に譲渡する	
1868	慶応4年	6	◎	大洪水があり、井堰等の費用として、久谷村が金札300両発行の願いを久美浜役所に提出	